

小木よもやま話 3



中 太雅（正成）



明治・大正時代の小木

はじめに

あのにゃ話は平成30年7月まで連載されてきました。元館長岩城康徳さんの「よもやま話」の連載終了後、多くの地域の方からの要望により、平成26年4月に、新しくスタートしました。

あのにゃの会は、昭和初期に、小木で生まれ育った平均年齢75才の方々9名に体験したエピソードをお話いただく会です。小木の特徴ある話し方、語尾に「にゃ」をつけて、「あのにゃ（あのね）」と親しみを込めて話す会です。その会での話をもとに、それぞれの体験をあのにゃ話として連載しました。

鳥捕り、嫁取り、お座まいり、映画館、鱈場漁、造船所の餅まき等のあのにゃ話には、昭和初期の日常生活の様子が色々な角度から再現されています。小木の歴史を知る上でも、資料として残すべきだと思っていました。

この度、上見純二館長さんのもと、よもやま話1、2編集委員5名の方々により、あのにゃ話が『よもやま話3』として発刊される運びになったことをたいへん喜ばしく思っています。

あのにゃの会の話で、載せていない話もたくさんあります。

一部紹介すると、昔の夏祭りはあんどんキリコでした。電線がひかれキリコが通れなくなり、庄崎の遊郭が山車（やま）を寄附しました。歌を歌い、引く祭りになりましたが、小木の本町（東町・西町）の気質に合わなかったので、後に、山車は押す祭りへと変わったそうです。また、小木の方言について

『にゃんは、可愛いにゃん』と思うにゃん。『どこかで、猫がいるぞ』と言われたこともあるにゃん。と話されていました。

「かやった（転んだ） とぼらんか（泳がんか） だんだ（風呂） かたがっとなる（傾斜がある） おってか（おいでるか）」などたくさんあります。これらの言葉には、やわらかさ、温かさを感じます。当時の人情や情景が浮かんでくるようです。

喧嘩の時、「くらっつけてやる、うどらっっちゃ、なんやてげら」などの方言は大変荒いと思います。

小木の言葉は荒いが、人の気はやさしいです。一読してもらえればありがたいです。

なお、前館長の私に言葉を書くように依頼されましたことを、光栄に思い感謝しています。

目次

はじめに		
一、とんばた	十二、	お座参り
二、たちこ	十三、	遊覧船
三、嫁どり	十四、	戦中戦後の頃
四、嫁どり2	十五、	函館帰りの土産
五、トボル	十六、	小木の石切り
六、鳥かまえ	十七、	夜撫で
七、烏賊釣りの思い出	十八、	海遊び、山遊び
八、代用食	十九、	鰯の荷揚げの思い出
九、造船所の餅まき	二十、	素人芝居繁盛記1
十、映画館	二十一、	素人芝居繁盛記2
	二十二、	履物
		二十三、雪遊び
		二十四、小木尋常高等小学校
		二十五、子供の頃の遊び場
		二十六、鰯場漁の思い出
		二十七、家族の呼び方
		二十八、衛生環境の思い出
		二十九、蚤と虱
		三十、山切籠の思い出
		三十一、夏の思い出
		三十二、昭和二十年の八月を思う
		三十三、俺らっちゃんの子供の頃の遊び

三十四、桜井医院のダットサン

四十六、秋の山

三十五、冬の暖房

四十七、廊下の掃除

三十六、マイモン（旨い物）

四十八、学芸会

三十七、とんばた、あれこれ

四十九、雪の思い出

三十八、鮭鱒の町

五十、ころがったバス

三十九、能登商船の七尾通いの船

五十一、とんばた、あれこれ

四十、はがやしい思い

五十二、思い出あれこれ

四十一、終戦の頃

連載を終えて

四十二、ハカバの狐

あとがき

四十三、宇出津のお斎市

四十四、火さま

四十五、賑やかだったお七夜参り

一、とんばた

S・Y

とんばた祭りは、石川県無形民俗文化財になったけど、おらっちゃん頃は、番屋で頭かしらや小頭こかしらのもん（者）のさいはい（指図）にしたがい作ったものや。伝馬舟を絡けてもろたら、舟のとも綱を切られんように、舟を沈められんようにと、かわりばんこで番をしながら、夜の明けるのを待ちました。何んできかと言つと、一番に起こすのを自慢するのに、いろいろと（ジャマ）をするげ。

伝馬舟を借るのに（頭や小頭と）一緒になって、「トウトウ」、伝馬舟借してくださいまとたのむと、「どいのもんや」、「〇〇のもんやけど」と言つ

と、「ほんなら借してやるか」と言われ借してもろ

た時は、うれしかったものです。

とんばたを起こすのは、艇てい子でしたので、勢いあまって海へ飛ばされた（もん）もおったしね。稲架はさ木も細く弱いので、竹を二、三本添わしたもんです。

二、たちこ

K・I

「あのにや今日うち（家）に戻ったら、たちこ遊びさあしんか」「どこにしよう、あんたどこに、するりゃいいげんけど」「ほっしゃ、後からいらしね」と話が決まると学校の帰りに、草山医院に寄つて「箱くだい」と言つと、「ありあさっき誰やら、

持って行ったがいね」と言われると、あわてて上田
医院に行って、運よくもらった時はうれしかったも
のです。もらった箱はみんなで分けて、たちこと部
屋を作ったげ。大小の箱で、二階と三階と梯子まで
作ってん。たちこの服はアカバと洋服を何着も作り、
着せ替えをして遊んだものです。箱はたちこの持ち
運びする時の入れ物にもなり便利なものでした。

店には美しい着せ替え人形もあったけど、小使い
の銭（お金）^{ぜん}では買えないので、集まってつくるの
が楽しみでした。紙を裁って作ったから、たちこに
なったのかなあ。

二、嫁どり

K・I

今90歳頃の小木のアンサマ達の嫁どりは、嫁さん
を主座に置いて、いっけ、親類で酒盛りをしおって
ん。アンサマは天高から見ているか、遊びに出るか
で、とにかく指をくわえていたのが、アンサマやつ
たげ。昭和の30年頃になると、景気も好くなり、嫁
どりに力が入り、華やかになり、縄張りや銭撒き
がはやり、嫁さんが家に入るまでが大変でした。

嫁さんが家に入ると、まづ神棚に詣り、仏壇のお
参りが終わると、家の主が羽織袴で二階から銭を撒
くようになったけど、縄をはる、銭をもらう、しつ
こい奴が出るようになって、一人占めするようにな

ったけど、昭和55年頃までは、嫁どりの銭撒きはしていたと思う。でっかい声を出して、こっちにも、こっちもくだいと、叫んでいたのがおもしろかった。

昔のアンサマは淋しい思いをしたのに、嫁どりは家で式をあげ、近所の人達に祝福されるのが、絆を深めるのに、役に立っていたのかなあ。

四、嫁どり 2

S・I

戦争中の嫁入りの話

こんな様子だったと聞きました。雲の降っている夜さらに、仲人の人の後ろについて、あんさまの家にそうっと入ると、囲炉裏の側に赤御膳が据えてあ

り、赤い大きなガンチョ（蟹）が皿に盛ってあったけど、あんさまに成る人は、どこかへ遊びにいったって、うちにはおらんかった。親戚のおばちゃんが一人居るだけで、そのおばちゃんが、ひとり言のように言われたのは、このガンチョをたべんこと二や、ここの家のもんになられんぞと言われ、食べるよに勧められたが、食べた思いはなんもない。何んしろ戦争中の時やさかい、こっそりと来たつもりやけど何時の間にやら、庭の方に人の集まってくる声がして来た。どんな事も見逃す事の出来ないもんや、障子に穴を開けて見ていたり、ざわざわ騒いであったけど、好い加減に、みんな帰っていった。

何やらハイダルイ時代やったわいね。

五、トボル

Y・I

オーイ、トボリ（泳ぎ）に行かんかや、と呼びに
来ると、揚げ場か、岩城か、御船かと、言いながら、
今日は入り（港）に波立つとるさかい、岩城へ行か
んかやと、風の具合を見て場所を決め、トボリに行
ったものです。男の子は、モッコフンドシ、女の子
はパンツ、男女ともにフルチンの子もおったけど、
何のわだかまりもなく、騒ぎながら遊んだもんです。
平成の世では風俗違反で、捕まってしまうでしょ
うね。長く泳ぎすぎてくちびるが紫色になり、ガチ

ガチふるえておったげ。三時の七尾航きの汽船が時
計代わりで、泳ぐのを止め、岩城の湧水で喉をうる
おして、うち（家）に帰ったものです。その昔、こ
の湧水で酒造りをしたと言はれていますし、田子倉
の大事な飲み水でした。分校の整地の折りに、消え
てしまったのが残念です。

六、鳥かまえ

S・Y

子供の頃に小鳥捕るのがはやってね。
学校に行くと、小鳥を捕った数を自慢するのに、賑
やかなもんだった。

暗い内に山に行くのがおとろしいので、先きにな

るもんをジャンケンで決め、夜明け前に、長い竹棒

にハゴをつけて、鳥の来るのを待っとるげん。ハゴ

は八番線をハの字型に曲げて作るげ。ハゴにつける

モチは藺の木の皮を剥ぎ金鋸で叩きつぶして、水に

晒して作るげ。藺の木も少ないので、庭木のものま

で剥ぎ取り、どやされました。俺たちのアド（場

所）は軍艦山、地獄山、極楽山やった。軍艦山は、

中学校辺りかな。大人のもんも霞網で捕ったりして

いたけど、保護鳥禁止区域になったり、渡り鳥も少

なくなり、なんだか淋しいね。

校内の発表会で、一年先輩のS君が、小鳥捕りの話

をしたら、大きな拍手に湧いたのをふっと思い出し

ました。

七、鳥賊釣りの思い出

S・Y

おらっちゃん（自分）の中学生の頃は、授業が終わると便船もらいと言って、小型船に乗せてもらい、

鳥賊釣りによく行ったもんや。釣った鳥賊10パイ

（匹）に対して、船幣（船賃）と言って、3パイか、

4パイを船主に納めました。4パイ取る舟はシャッ

コイと言って嫌われました。その銭（お金）は小遣

いにしたり、学生帽や、学用品など買って自慢をし

たりしたもんや。学校でも、トウト（父親）もカー

カ（母親）も認めていました。鳥賊釣りには、ベタ

（女の子）もありました。ボンチヨは男の子、ベタは女の子のことです。

学校でも、余裕を持って対応してくれました。

家でうろろしていると、どすもじょう（甲斐性が
ない）と言はれ叱られたもんです。あの頃は、小木
は沖合いでよく烏賊が釣れ、町も活気に溢れていま
した。野暮（無茶）な体験でしたが、オレ（自分）
は、良い思い出として一人胸に納めています。

八、代用食

K・I

いまは、うどん、ラーメンなどは、代用食になる
のかな、ご飯の方が代用食かもしれんね。昔はナシ

イモ（ジャガイモ）やサツマイモ（薩摩芋）（甘
藷）などは、ご飯の代わりの代用食だった。

学校の昼休みには、家にご飯（昼飯）を食べに戻
るもんも大勢いたが「芋でも食べて行けや」と言わ
れ、家にある物を食べて学校に戻った。あたり前に
弁当を持って来るもんもいたけど、特別なおかずを
作って来るわけでもなく、弁当の上に梅干をいっぱ
いのせてくるもんが多かった。萩野本屋さんへ「買
うわねん」と言って十円とおかず入れを出すと、福
神漬や小魚の佃煮が買えた。それは、上等のおかず
だった。満足なおかずなど持って行けない為、弁当
を持って行った日は、弁当を食べる時はほとんどの

ものは、隠して食べておってん。

給食などは想像もつかない時代の時でした。

九、造船所の餅まき

K・I

船木、上野、小木造船所の三ヶ所に、木造の船を

造っていました。新造船の船卸し（進水式）には、

雑煮餅のような丸餅が沢山まかれました。下に落ち

た餅に、土や鉄屑、おが屑にまみれたのを、夢中で

拾い合いをしました。最後には大きな鏡様（鏡餅）

を一と重ね、棟梁が思い切り投げていましたが、ど

うも顔見知りの大事な人に投げていた様だった。

鏡餅や、小餅の中にはお金が入っているのもあり、

二重の喜びに万歳をしたりして嬉しかったです。

新保の南口棟梁が私にも合図をしてくれ、鏡餅をま

くふりをして、もらった時は特に嬉しかった事が思

い出ずげんて。夢中で拾い合った。おが屑まみれの

餅の感触を、今でも忘れられんげて。

十、映画館

K・I

小木の町の映画館は、庄崎の山本さんの九十九劇

場と、下浜の田中さん（デンサ）の小木劇場と、二

軒もあってんぞ。小木劇場は、どさ回りの可愛君子

の人数が多く、君子の後援者でいつも満員やった。

九十九劇場は、花道もあり、楽屋も広かった。

両劇場は映画の方が多かったが、九十九劇場に後藤富定と言う人がいて映画や芝居のある時は、背中にビラを掲げて、太鼓をトントントンと打ち鳴らしながら町を回っていたので、とんとん富定と言って、重宝されていたしね。映画や芝居のある日は、庄崎から新町の揚げ場まで、伝馬舟でむかいにも来たりしてね。映画の帰りのさぶい夜さりなど「誰もおらんさけかぶろう」と言って、スカートの裾を肩までまくり上げて帰る事もあったりね。クーラーや扇風機のない時代やったから、莫蔭や団扇を持って集まり涼み乍ら色々の話をして、近所仲間の絆も深くなり、話も面白かったん。

十一、烏賊釣の思い出

S・I

日の暮れに成ると、姑も嫁も叔母さまもないこと
にや発動機船に乗って、海田浜の長手の岬の沖へ、
十分ほど走ったなあ。

竹竿をさげてさぶくと、いきなり引っかけて釣
れたもんやがねん。あの感覚は本当に忘れられんね。
でも、姑様や叔母様に負けた時は、はがしかったね。
やがて日が落ちて、烏賊が食わんようになると港へ
戻り、烏賊を開いて干し烏賊にして、在の方に持つ
て行って、米や野菜に代えて、生活の足しにしたも
んやねん。でも、今になって見れば、あの頃がほん
とくに懐かしい。あのぎょうさん居た烏賊は、どこ

へ行ってしまったのか、不思議でならない。

烏賊を釣る御船神社の沖合ひに

十二、お座まいり

K・I

ほんのちょっと昔のことやったけど、四十九日、一周忌、三回忌、七回忌の祥月命日には、お座詣りがあつてん。坊さまに来てもらい、近所の人がお経をあげ、お坊さんの話を聴くのをお座といっていました。お座のあることが分かると、子供らはその辺りで遊んでおつてん。

家の人から、「あんたらっちゃ、詣りの触れに行つて来てくだいま」と頼まれると、うれしくて、う

れしくて、三、四人で「〇〇の町の〇〇のうちに〇時から、まいりあります」と大きな声で廻っているはずなのに、「あんたらっちゃ、しっかり言わんと聞こえんよ、どこに詣りあるげん」と注意されることもあつたり、ぼんちよ等に、ひやかされる事もあつたけど、町をずっと廻つて来て、その家の近くまで来ると、家の人に聞こえるように、叫ぶようにでつかい声をあげました。

十二、遊覧船

S・T

終戦後、九十九湾を訪れる人がだんだんと増えてきました。浅井旅館に宿泊する人があると、旅館の

近所の男たちに頼み、伝馬船に莫蔭を敷いて、艀を

漕ぎながら案内をしていました。その内に浅井旅館

の奥さんが、小木音頭を作詞作曲されたのを体育大

会や外の行事でも、皆で歌い踊ったこともありまし

昭和三十年頃になると、観光客が増えて来るよう

になり、遊覧船を造り運航するようになりました。

五月の連休や夏休みになると、奈古浦の船木造船所

のあたりから、鮭鱒の船の修理に来た人の車や路線

バスで、二進も三進も行かない状態になり、時間の

遅れに、はらはらさせられました。

また、遊覧船の数が足りなくなつて、定員の倍も

のお客さんを乗せて、保安庁に呼び出され叱られ、

何回も始末書を書かされた事もあったげん。

十四、戦中戦後の頃

S・I

昭和十五年の頃、新町の端に坂本の店が出て、

なんでも珍しい品物が沢山有つて、友達を誘つては

買い物に行ったもんや。その頃は、履物も自由に買

えない時代やつてん。

運の悪い私は、貧乏くじばかりで、中々靴が当たら

ず、下駄で通学をしていたものです。ある雪の融け

かかったぐちゃぐちゃの道を、下駄掛けで坂本の店

へと歩いていると、下駄にぼっこりが付いてしもう

て歩けなくなつて来たので、或る家の雁木の柱に、

こんこんと下駄をけって、ぼっこりを叩き落として
ったら、家の人が戸を開けて見とったんで、びっく
りあわてて、その場所から逃げた事を覚えています。
今になって思えば不思議なもんで、その家へ嫁いで
この年になりました。

縁と言うのものは不思議なもんですよね。「雁木」
は軒から庇を出して、雪を防ぐ小屋根です。

十五、函館帰りの土産

K・I

むつり
烏賊の漁が一漁期終って、船が小木に帰る時は、
どこの船もぎょうさんな土産を積んで来てんよ。

リンゴは今みたいにダンボールでないげよ、ダンボ

ールの三倍ぐらいの木箱にリンゴがすんねかに埋っ
とって手を突っ込んで探してんわ。最後の一つが見
つかった時は、本当に興奮したもんや。

そんなリンゴを五箱も大箱に積まれ、あとは塩烏賊、
ヘイカ（スルメ）、キビ団子、昆布、なしいも（じ
やがいも）、デンプン粉などで、土間が一杯に
なってるよ。烏賊場に行ったらん家や親戚の家の土
産配りが嬉してね、風呂敷に包んで配りんよ、ナイ
ロンの袋などない時代やからね。

雪も毎年多く降ったさかい、下駄のぼっこり落とし
ては配りんよ。

夕暮れには、どこの家からも塩烏賊の焼く匂いがし

ていたもんや。夜は炬燵でリンゴを剥いて、たべるのが嬉しかったん。

十六、小木の石切り

S・T

あのにゃん、おらっちゃんの子供の頃は「今日は石屑がいっぱいあるさかい、学校が終わったら、すぐさま石屑運びに來い」と、とうと（父親）に命令をされた。授業が終わり、皆んなが遊んでいるのに、しゅしゅと重たい石屑を箆すくに入れて、運んでは崖から石屑を落したもんや。ハゴタエ（反対）などすれば大変で、夜のメシ（御飯）も抜きになるし、それはそれは大変な事です。とうと（父）の作った石材

を大八車につんで揚げ場まで運んだ車の輪は、ゴムではなく鉄の輪なのでなかなか動かず、ぬかるみもあれば、穴ぼこだらけの道をガラガラとベソをかきながら、井上（ヨッショモン）の揚げ場に運び立て並べた上をボンチヨ（男の子）らが、オンペをして遊んどった。石材は番匠の機帆船が、越中へと運んで行った。越中では小木石の蔵を造ったと云われています。その頃は景気も良く、石切りの人もたくさんおったしね。今は誰もいなくなり、石を切り出した山だけが残り、淋しくなってしまうた。

十七、夜撫で

Y・I

藤の花の咲くころになると、夜になったら夜なでに行行って来んかと言って、夜なでに行つたもんや。夜になるとサザエが波瀬に上がってくるのを、明かりを持ってサザエを取るといふより、拾うようなものです。懐中電器や松明を持って、草履がけで、日和山の下の波瀬、海田浜の大波瀬、小波瀬。金剛山の下下の波瀬へ、徒で行く人、伝馬船で行く人、自分の網戸あど（好い場所）へ、それぞれにサザエを取ったもんや。俺の場合は、高浜の山下（新造）のトウトと、バイ（仲間）のものと、二、三人で日和山の波瀬へ連れて行ってもらてん。姫の弁天島まで行つた

もんも居ったしね。海に落ちたりすると、トボラン

かやと言って、あそんだりして、ウチ（家）に着くと、濡れたままデンサの風呂に入って、身体をぬくめてウチに戻ったもんや。松明は、青竹に布切れを巻き、石油をしこませたものです。

十八、海遊び、山遊び

K・I

子供の頃の話ねんけど、授業の始まる鐘が鳴り、先生が教室に来られると、すかさず誰かが「先生今日、天気いいねん」と言つと、先生は「おう、そつやな 海でも行くかあ」と言はれると、わあっと一斉に教室を飛び出して海へと向い、海遊びが始ま

る。メッコ（しただめ）やサザエなど採る者や、只、ぶらぶらと遊んでる者、転んでずぶぬれになる者など思い思いに遊んで帰ったもんです。

またある時は、「先生今日天気いいぞ」と言う、「そやなほんなら、山でも一回りしてくるか」と、山遊びとなり、栗拾いする者、茸を採る者、皆それぞれに、楽しい自由な授業に満足して帰ったものです。今の子供たちに、それが出来ないのが、なんか可哀相な気がするが？

勉強、勉強で頭の中は重いだろう。たまには、心ほぐして、自由に遊んでもらいたいととんだ老婆心でごめんね。

十九、鰯の荷揚げの思い出

K・I

昔、新町に漁業組合と鮭鱈の組合があつてん。

荷揚げ場にでっかい量りがあって、鰯場の船が入る時間が近づくと、大人も子供もみんなして待つとるげん。大人は缶焚火で暖まるけど、子供はおんぺ（鬼ごっこ）や隠れぼんちよをして走り回っておったげね。沖の方で灯りが小さく見えると、「船来たぞう」と誰かが言うのと、大きな松前籠を引っ張り出して待つとるげ。船が籠の所に横付けすると、荷揚げ始まるげん。量る所まで籠を次から次と、引っ張って行き、量り終わった鰯は籠のまま並べて行くげんわ。傷のついた鰯や、外の網にかかった魚は、分け

合って家にかえりんよ。今みたいにベルトコンベアなどなかったし、なんのせ寒いときの荷揚げはたいそなかってん。

二十、素人芝居繁昌記 1

S・T

ついこないだ、ある人が、劇場無いがになってしもてんよと聞かされ、色色な事が思い出してん。

戦前戦後あの劇場には、色んな事があったなあ。

俺っちゃんのずっと上の人らっちゃんが、「父帰る」

「番場の忠太郎」の芝居をしたげん。その時分は男

の人ばかりで、女形も男の人が、お白粉をつけて

出るさかい、誰かようわからんげ。ありゃ「あっこ

のあんまや」と言って、「おや、大好きな人やったねん」と言って、よう騒いだもんやった。

それから姫の人らっちゃんが、娯楽会をするようになり、小谷内のお爺が、大きな腹に顔を描いて、踊り出すと、面白て面白て、そりゃまあ大変な笑いで、賑やかなもんやった。舞台の締めは花街の姐さん達の三味や太鼓の総おどりで、そりゃあまあ賑やかなもんやった。

二十一、素人芝居繁昌記 2

S・T

戦時中に俺達も出て、男の人と一緒に芝居やらやクザやマドロスの踊りをしたげん。同級生が「赤城

の子守唄」を踊った時など、白の股引きが無うて、股たぶ出して踊ったげん。学校に行ったら、先生に「女だてらに、足だして踊ったらだっちゃかん」と、怒られてしもてん。「ほう言たって、股引きなかつたもん」と、はごたい（反対）言つと、後は皆で大笑いになつてん。

もっし（面白い）かつたわねん。

終戦後は三益愛子の母もの映画を観に行つたわ。何故か劇場の都合の悪い時は、お寺で良く映画や浪曲があつてん。いつも満員なので、映画の時は裏に回り寝ころんで、観とつてん。物のない時代やつたけど、町には活気があふれていたもんや。

今では、テレビの時代となつてしもて、昔みたいが集まつて、話するもん（者）も減つてしもて、何やら淋しい町になつてしもたね。

二十一、履物

K・I

私等の子供の頃の履物の事なんやけど、下駄、足駄、草履の人がほとんどやつたと思う。

祭りには、必ず新しい流線型の下駄を買つてもろて、履くのが嬉しかつてん。

歯が二枚の下駄やと、雪の中うっかりと、履いて出ようもんなら、「ぼっこり」が付いて、おうじょうしたけど、流線型やとそんな心配もないしね。

靴と言えば長靴を短くしたような、同じゴムで出来

た浅靴とか短靴を履いってんわ。

皮のパンプスなんて、洒落たもんなないし、内履は藁草履とか、雪駄の様な草履とかがほとんどやってん。

それでも今思うと、足の健康には下駄や草履の方が良かったと思う。水虫や外反母趾の予防に、役だっておったと思う。雪や雨の日に着るものは、ゴザボシ、マント、オーバを着ました。

二十二、雪あそび

S・Y

おらっちゃんの子供の頃、雪がぎょうさん降ってなあ。自分なりに櫛やスキーを作って、さわぎながら滑ったもんや。近所になあ、おとろしい婆はおってなあ「こりゃ滑ってあるかれんがいや」と言って、よく叱られもしたが、冬の遊びはそれしかなく、夕方近くまで遊んだもんや。どこの町内も同んなじように、「わああ」声を荒げて楽しんだもんや。今のように暖房もなく、家にあるのは炬燵だけ。学校では、職員室の先生たちの股火鉢、教室には四角の大きな火鉢が一個で、寒くて勉強どころではなかった。

昭和三十八年大雪の年、雪下ろしに二階から出入

りをしたし、昭和五十六年の大雪の時は、松前籠に雪を詰め込んで、町内総出で海に捨てたもんや。

そんな雪も子供には嬉しく、町の中はスキー場のようで、子供天国だったと思う。

二十四、小水尋常高等小学校

S・T

俺っちゃんの子供の頃の学校の事やけど、なんのせ昔のことやさかい「男女七才にして、席をおなじゅうすることなかれ」と言うことなので、一年生から男女別々の教室やってん。ほやさかい、どんな男の子が居たったのか、なんも知らなんだっただけ。

毎日朝会あってん。鐘が鳴ると、男は東、女は西の

控え所に整列して、前え進めの号令で講堂に入り、男は右側、女は左側、一年生を中心にして両側に並びと校長先生が壇上へ上がり、白の手袋で御真影の扉を開け、最敬礼をして朝礼が始まるげん。校長の話が長いと、小声で止めろ止めろと言ったりしてね。校長の話が終わると、乃木大将の訓示というのがあってん。毎朝、乃木大将の訓示と告げられると、大きな声で、「暑い時は寒いと思え、寒い時は暑いと思え」「寒中水で顔を洗う者は幾人いるか」という訓示が十カ条あってん。寒風摩擦もあったり、朝会が終わるとほっとしたもんや。

二十五、子供の頃の遊び場

K・I

海田浜に大波瀬や小波瀬のあった頃は、海は子供らの遊び場やってん。

波瀬でおもちゃんこやメッコ（貝傘）取りとかをして遊んでは、ヨサブロ（波瀬）の下やトランダ（寅松）の下とかに、手拭いの端を二人で持って、「ヤマカンテッパ」「ヨウテッパ」と騒ぎながら魚取りをしとってん。掬ったテッパを生で飲み込んだり、飲まされたりしてね。

ガンチヨ（蟹）やペンチヨ貝（傘貝）を取ったり、オベレンコ（クラゲ）や、うみぼっこ（海牛）を突っころがしたり、モンコタンチ（キヌバリ）や、が

ら（ドロメ）、シングン（キュウセン）など、ぎょうさんおってんわ。家の内では、イシナゴ（お手玉）、たちこ、あやとりなど、特に男の子は、桶の輪廻しで走りまわっとってん。

今は誰もせんようになってしもたけど、あの頃は、本当に面白かってん。

二十六、鰯揚漁の思い出

S・I

それわ、それわ昔の事やけど、学校から戻ると、船を見に行けと言われて、庄崎の劇場の端に、風の吹いとる寒い所に立って待つとるげん。やがて風と波にもまれて、木の葉のように浮いたり、沈んだり

して、鰯場船が帰って来るげん。どうにか揚げ場に

着くと、丸い縄籠にむだかった縄を揚げて、きれい

にすにするのが大人の仕事やけど、子供等は、御菜ごやさい

の魚を分けてもらい、うちに戻るげん。その鰯を味

噌汁にして、とうと（父）の帰りを、ヨナタ（囲炉

裏）に火を焚きながら待っとるげん。しばらくする

と父は手拭てふきの端に、なぜか三合飯を包んで持ってく

るげんて。そして家内が揃ったら夕飯が始まるげん。

おばあさんは一人御膳やったけど、楽しい一っ時や

ってん。あの頃が泣きたいくらい懐かしいのは、な

んやろね。

エサブもうまかったけど、白いふわふわの豆腐のような
煮ごこりも、うまかったなあ。

二十七、家族の呼び方

K・I

子供の頃の事ねんけど、両親や兄や姉を呼ぶ時は、

ほとんど、とうと、かあか、あんま、たあた、じい

じ、ばあばと呼んどってん。でもあんまに兄ちゃん

と呼んだ記憶は、何んにも浮かんで来ない。ところ

が今では、パパ、ママが多くなって来たね。家の

孫等もずっと、じいじ、ばあばねんけど、学校で

「ばあばじゃないでしょう。おばあちゃんでしょ」

と注意をされたと言うので、「気持ち悪う」と言う

たもんやさかい、外では、ばあちゃん、家では、

ばあばと使い分けておるみたい。

一番上の孫は、ばあばと言ってから、ちゃわついて、

ばあちゃんと言いついて直してくれるけど、小木ではやっぱりじいちゃん、ばあちゃんやさかい、ちよっこりはずかしい様子だが私個人としては、ばあばの方が落ち着きんけどにゃん。

二十八、衛生環境の思い出

S・T

終戦後、おらっちゃ子供の頃やけど、衛生環境が悪く虱や蚤みみずがどこの家でもおったがや。着物の縫い目や毛糸の編目の虱を、歯でかみ殺し唾と共に吐き捨てて、「さあ着れや」と言って渡されたもんや。

学校では女子生徒が髪にDDTをかけられ、頭は真っ白にしていたもんや。

さなだむし

回虫の真田虫の駆除に苦い薬草の汁を、強制的に吞まされたり、年に一度の家の大掃除には、畳を天日干しをして、埃を叩き出した部屋には新聞紙を敷き替え、DDTを散布して終ると、役場の人と御巡りさんが、検査に廻り厳しかつてん。

ほっから みみず

また道や溝の凹凸で雨水が溜まり、子子や蚯蚓が居ってね。親は蚯蚓が鳴くと、明日は晴れると教えてくれたが、駆除をするのに、粉石鹼も使ったり、DDTを散布したもんや。

蚯蚓は本当に鳴くのでしょうか。

聞きたいと思いませんか。

二十九、虱と蚤

S・T

あのにゃ、おらどまの子供のときに、虱という虫がおったげぞ。頭の虱は黒色で、体に居る虱は白やってん。虱の卵はキラジと言っつつてん。

学校で体操時間や梅雨時の朝礼の時とか、前のものの頭とか着物に、もそもそと這うとるげん。誰彼とはなく、みんなそうやってん。洗濯するにも石鹸なども乏しくてなあ。風呂やてて一週間に一度入りや良い方で、十日も二十日も入られなかった。水で体を拭くか、よっほどの時は湯で拭くしかなかった。夜になると、よなた（囲炉裏）のほとりに集って、頭は梳櫛で梳いて、シャツを脱いで、シャツの縫い

目にズラツと並んだキラジを爪にむしり取るか、ハガヤシなると齒に噛んで取ったりして。今思えば、それはそれは、不衛生きわまる事をやっておってん。布団に入ると蚤も居ったしね。虱や蚤に攻められても、みんな元気やった。八十年前の事やけどね。

イシカワケン、ノミグン、アザキラジと云う寓話もありました。

三十、山切籠の思い出

K・I

私等が子供の頃、小木に七月の十日の恵比須、十一日の観音祭に切籠を引き廻したげよ。

切籠には殿様や姫さまの人形に、屋形や池や山な

どを飾ってね。町内毎に家を借りて、飾り合ってん。

余所よその町内まで見に行ったもんや。太鼓も掛声も袖

切籠とはちょっと違うげ。デンコデンカツタイコ、

デンカツタカツタコイデデンコデンデン、ソレツと

掛声を挙げては引き廻したもんや。早馳けはヤッサ

ヤッサと言うて、太鼓もデンデンデンテゴテンと早

打になり、大声を上げて前の人の足を踏んだり踏ま

れたりしてね。でも、自分一人の力でも切籠が動く

ような気持ちになってね。切籠の車は、でっかい松

の丸太でね。ギイギイと何とも言われん。

あの音が今でも耳に残っているげんて。

三十一、夏の思い出

S・I

九十九湾と言う素敵な、日本百景の町に生まれた

のは、なんと幸せ者やと思とるげん。とぼり（およ

ぐ）に行くのも、何処にとぼろが思いのままやさか

い。私は、小学校へ入学する前に、あんま（長男）

に教えてもらてんは。まだ小学生の時やさかい。恥

ずかしがも何も分からんし、生まれたまんまの姿で、

とぼつとるさかい、造船所の大工さんが「こりゃ見

えるがや」と、遠くから大声に冷やかされたけど、

雷が光ろうが、雨が降っても、中々海から上あがらな

んだもんや。

友達の家が庄崎の置屋で、三味線を弾く格好をつけ

て「ペンコシヤン、ペンコシヤン」と歌いながら、トボーンと言うて海へとぼし（飛び込む）込んだりしてね。高学年になってから男のランニングに、猿股をへっつけ（くっつける）て着て、日和山の波瀬に、騒ぎながらとぼった事を思い出しておるわいね。

三十二、昭和二十年の八月を思う Y・I

昭和二十年の夏のある夜、富山に花火が揚がってるぞと言う声に、揚げ場に父と見に行ったら、ぎょうさんの人等が騒いでおるげんて。火柱が立つたんびに騒いでおると、役場の人が富山の空襲やさかい、皆んなうちに戻れと言われたので、家に帰ったげ。

おれ御真影の係やったので、学校に行こうとしたら、うしろから清水先生と梶本先生が、お前うちに居れと言われ学校に走ってゆかれたげ。次の日の小木の空は灰色になってもてん。稲田の母ちゃんが、おらとこのアンマ、富山に勤労奉仕に行つとるげん、どうしよう、どうしようと父に泣いてしがみついとるげ。

火薬になるからと海藻を刈り取り、乾燥したのをバラスシと真木さんの所は草原やったさかい、そこに積み上げてんけど、自然発火して灰になってもてん。新保の沖に船舶が沈められたりして、八月十五日に終戦になってもうたが、こんな事を思い出す年齢になってもたわいね。

三十二、俺らっちやの子供の頃の遊び K・I

ちよつとちよつと聞いてください。ゲームとか、スマホとか、思いもせん遊びの時代やけどねん、昔は家の中で遊んどる者^{もん}たちは、誰も居らなんでは。皆んな外にばかりで、自分達で遊び方を考えたりしてね。テレビも電話もなかったけど、別に不便とも思わんなけどね。雨の日はしょうがないさかい、たちことか、はじき、いしなご、カルタ取りで遊んだげて。雨の降らん日は、外にばかりおって、桶の輪廻し、瓦倒し、地面取り、おんぺ、花一もんめ、達磨さんが転んだ、ゴム飛び、かくればんちょ、竹馬、波瀬遊び、などなどぎょうさんあったけど、大

分忘れてしもたわ。とにかく暗くなるまで、よう遊んだもんだ。「ご飯やぞう」と呼ばれるまで遊んださかい、皆んな元気いっぱいやったわいねん。家の中でゲームばかりしとると、目も悪くなるし、もやしっ子になるぞねん。

三十四、桜井医院のダットサン

S・T

昭和の十一年か十二年頃やったと思うけど、「オ―イ」、わっちゃ、わっちゃ、今なあ、桜井病院に、ダットサンの自動車^おが居るげんじゃ。おらっちゃ今乗せてもらたげん。わっちゃらも乗せてもらえや。早いわ。もっしいわ（面白い）と言いながら、また

桜井医院の前にダラ顔して見とったら、運転手が、みんな乗れやと言われたので、好奇心一杯で今度は一番前に乗ってん。

そしたら前の家がスースーと後の方に行くげん。次ぎの家もまた後の方へ飛んで行くようだったので、みんなワーワ声をあげておってん。車から降りても、また乗りたいなあと言いながら家に戻ってんけど、家に着いてから、親や弟妹に話したら、人を乗せて何と早ように走る機械が出来たもんやと感心もんしんしたもんや。終戦近くまで駆^{はし}っておってんけどね。当時車と云えば、桜井さんのダットサンと和嶋^{なかいち}中一さんのオートバイだけでした。

三十五、冬の暖房

S・Y

おらっちゃんの子供の頃の冬の暖房は、囲^{いろり}炉裏・炬^{たっ}燵・火鉢が主体やってん。薪・炭・練炭・豆炭を利用しとってん。薪を燃やした時に、残った櫓^{ほだび}火は消壺に入れて、消炭を作ったりしてね。囲炉裏にも大・中・小とあって、農家や寺は、畳半畳の三尺炉や、六尺炉があって、立派な自在鉤があって、鍋や鉄瓶などを吊しとってん。

在所のおやつ様の櫓の自在鉤には、縁起物が彫っており、自慢でもあり宝物で大事にしとってん。今でも結構残っております。小木の家の炉は小さく二尺五寸〜二尺でした。二階用はまだ小さく、バスケット

トボールを半分にしたような物で、下から見るとまるで鉄兜のように見えました。

終戦後は炭が主役で、練炭や豆炭が出廻り、囲炉裏の炬燵も、自然と練炭や豆炭に変わってしもて現在では、電気・瓦斯・^{がす}灯油に変わって仕舞い、楽な生活になり有りがたい事です。

三十六、マイモン（旨い物）

Y・I

店に買物に行く時は、「マイモンコウワネン」とか「マイモンクダイ」とか言っては駄菓子を買に行ったもんや。或る日、学校の帰りに、一級上のMSが、現在の広瀬のガソリンスタンドあたりに、

俺を待っとるげん。これからマイモン買いに行かんかと言つので、びっくりして、俺^{ぜん}銭ないわやと言うと、銭^{ぜん}ならあるげん、ほらっと、五十銭銀貨四枚を見せるので、そのまま一級下のSMを連れて買物に行つてん。

庄崎のシヨウモン（上口）から買物して食べ歩きして、高浜のコウバンシヨ（上野）、シヨウシチ（山城）、下浜のニガタ（山城）、餡物の高い店は行かずに、小島の菓子店、サノスケ（奥成）、ヤスムサ（平沢）と廻り、西で（西町）まで行つてんけど、ゴンザ（坂口）は塩と下駄の店で、他に岡田の酒屋だけだったので、宮へ行って残った物も食べた

が食べ切れず、二十銭と残った物を持って帰ったら
父親に叱られ、父親に連れられて残った物を持って
謝りに行った。小学校の三年坊主でした。

三十七、とんばた、あれこれ

S・O

俺達の子供の頃は、伝馬舟の艀を漕げないと、伴
旗祭に参加出来んから、学校から帰ると、奈古浦の
友達の家で、本気になって練習したもんや。

奈古浦は九十九湾の中の入江の一つで、九十九の
入江には、すべて名がつけられている。その入江の
名を憶えさせられたのも、今はなつかしい。

波瀬のようなぎょうさんな岩場があり、そこで水

浴びをして遊んだりしたり。蓬莱島には沢山の万葉
植物が生えており島の上には弁天さんのお宮があり、
恰好つけてお参りをして、楽しんで遊んだもんや。

奈古浦は当時、船の出入りも少なく、静かな美し
い入江やつてん。

それから六十余年時が経つと、伴旗祭も曳船で、
巡航出来るようになったのは、本当に有りがたい。
四月十七日、十八日の朝天候が良く、蓬莱島に行け
るようになると、若い衆が三丁艀で漕いでくれた。
あの姿は、勇壮なもんやった。

伴旗祭も遊び方も変わってしもて、何んやらちょ
っぴり淋しいね。
なみ

三十八、鮭鱒の町

Y・I

昭和三十年〜四十年頃の小木の町の事やけど、三

月〜五月頃は日本海の鱒はえなわの延縄、四月〜七月は中部

の鮭漁、七月からは北海道への烏賊漁で、町は活気

に溢れておってん。日本海の鱒漁、中部の鮭漁、烏

賊漁の祈願祭には、お宮の参拝場は、船主と船頭さ

んで溢れて満員だった。

水嶋字宮司の手伝いをさせて貰った。

よき時代であった。

朝起きると鱒の縄籠が置いてあるから、餌の始末と

鉤のつけ替えをしてから、自分の仕事をしたのもな

つかしい。

どこの船主なのかも、分からないのに、仕事をする

のに何んら不安もなかった。賃金を貰って船主が分

かるんやから、暢気な時代やったわね。日本海の鱒

漁が終わると、伴旗祭、中部船の出港と続き、町の

中はテンヤワンヤの毎日であった。

七月の切籠祭が終わると、北海道へ烏賊漁に行き、

十二月に帰ると、鱒の漁などに出漁する船もあり、

漁師さんは休む暇もなかった。

あわただしい時代やったわね。

三十九、能登商船の七尾通いの船

S・T

赤紙 兵隊に召集される時の令状

白紙 勤労奉仕に徴用される時の令状。中学生、

女学生、青年学校、一般の男性など

白木の箱 戦死された軍人の遺骨の箱

赤紙で兵隊に召集されて入隊する時も、戦死して

白木の箱で帰って来るのも、白紙で徴用される時も、

七尾通いの船に乗って行ったもんや。菊丸と云う船

にね。山城の波止場から、親兄弟たちと別れていつ

てん。新町の築港から、犬山の裾を廻り、見えんよ

うになるまで、手を振り声を挙げて、別れを惜しん

でいた光景は、今でも浮かんでくるわいね。

小木の石切の人達も、軍隊の倉庫となる石山（現

在のハニベ岩窟）へ徴用されて、あのぢぐざぐの洞

窟を作ったのを、終戦後、父が話してくれました。

また戦死された家には、（遺族の家）と云う表札が

付けられてね。あの頃は皆な戦々恐々としておった

けど、ほんと良い時代になったもんやね。合掌

四十、はがやしい思い

Y・I

夏になると、何となく、はがやしい（くやしい）

思い出が湧いてくる。夜釣りの魚を一連ごと盗られ

る事が、本当にはがやしかった。今のうちに、クー

ラボックスなどない時やさかい、釣った魚はヤメ

(綿糸)に通して、岸边に吊るしておくのだが、昼なら獲物を取りに来るのが分かるが、夜釣りは、まったくの暗闇の中で釣っているので、犯人は全然分からん。ばしゃつと水音がするので、またやられたと、くやしがっても後の祭で、とぼとぼと家に帰った。年寄りに話すと、「アンマそれカワソかわうそ(川獺)や」と教えられたが、いま思ってもはがやしい。

また、冬の烏賊釣によく行ったが、漁師達が今日は晴れとるさかい、狐の嫁取り見られるかなと言つて、カソバ(火葬場)のあたりに出てくるから、見とれやと言ってくれたが、とうとう見る事は出来なかった。

この年になると、いろんな事が、うかんでくるのやて。

四十一、終戦のころ

Y・I

八月が近づくと、色々なことを思い出すね。

国民学校高等科一年の時、一級上の二年生と勝尾先生の姿が、突然消えてしもてね。校長の松坂先生が、今日から君達は最上級生になったから、何事にも皆んなの手本になるようにと訓示をうけた。それも終戦になる前の年にね。青年学校の女生徒は、九十九劇場が、飛行機の部品を作る作業場になったので、動員されたりね。消えた上級生は、能登内燃の軍需

工場に動員されたのや。能登内燃は、湊鉄工所と閨^{ねや}谷鉄工所^{たに}が合併され、軍需工場になってん。九十九造船、船木造船、上野造船も合併されて小木造船所となつて、軍用船を作つておつたのや。上級生は半日は工場に働き、わずかな時間に授業を受けていたらしい。福井、富山と空襲をうけ終戦になつたけど、一級上の卒業式や、俺達の卒業式の記憶はまったく残つておらんけど。半紙半分ほどの卒業証書があるさかい、卒業したんだろう。

福井、富山の空襲にB29が、五十機余り飛んで来たんやと。

四十二、八力バの狐

Y・I

小木の町にも、ゴン狐のような昔話を、年寄りたちから聞いたのを思い出してね。今もあまり変わつたらん墓場を、カソバ（火葬場）と言つとてん。

そのカソバから姫へ行く道路のちょっと小高い所に、大きな洞穴^{ほらあな}があつて、その内に、狐かむじな^{もん}が知らんけど、居つてんと。その洞穴に行つて必要な物を^{もん}お願いすると、願いどりの物を、ちゃんと揃えて借してくれたそうな。ある時、一人の老婆が、狐との約束をやぶつてしまつたら、狐が怒つてしまつて、その後は何んの願いごとをしても、何んも借してくれないようになってしまつてんと。

九十九湾の蓬莱島に行つて、お願いすると願いど
うりの物を、揃えてくれたとの話ものこつとるげ。
蓬莱島の神さんは弁天さんやから、美しい物を借し
てくれたかな。

四十二、宇出津のお斎市

S・T

九月になると宇出津に、お斎市があつて何んでも
祭のようやつてん。娑婆やーになったら、宇出津へ
行けや、とまで言われておったがや。宇出津でがど
んな所やらなーと、子供等は言つておったげん。

そんな時、宇出津の市にサーカスがあるげんとな。
サーカス見たいなーと言つとてん。カァカ（母親）

サーカス見に行くさかい、ゼン（お金）くだいと
言つて、どうにかゼンをもううたげ。そして行く日
を決めたげ。俺らっちゃ船でチへ（浅谷）、ヂスケ
（浜野）どっちかの船で行くわ。俺らっちゃ船に酔
うさかい、歩いて行くわと言つて、四、五人で、歌
を歌いながら、二時間半程かかつて歩いて行つたげ
ん。船に行ったもんが場所取つておいてくれてね。
アゴノイで（見上げる）高い所の綱渡りや、ブラン
コをひやひやしながら見た後、市を見て廻り、又、
歩いて帰つて来たげ。履物は、わらぞうりと下駄や
つてん。小学校の三年か四年頃だったと思う。

昭和十三年頃です。小木の人は番傘市とも言っていました。

四十四、火さま

Y・I

昭和二十年八月十五日、終戦になったけど、あらゆる品物は、足りなくて、それはそれは困っておったげ。マッチも中々買えず、買っても、湿っておるような、悪質な物が多くて火がつかないのが、普通やったげ。近所の人が、岩城とうちゃん火種くだいまと言っでは、火種を貰って行ったもんや。戦争中に山から掘り起こした、松の根っこの油の多いのを、こじまつ肥松と言って火がつきやすいのを、キャンディの棒のように作り、父に渡したら喜んで、それに火をつけて分けておったげ。その後、厚紙に硫黄いおうをつけた、付け木と云う物が出廻り、マッチも質が良くなって

来てね。その頃、闇市と言って、何でも売っている店が出来はじめ、小木でも新村さんの前の広場で、二軒の店があってんけどね。

今では電気・ガスで一発に着火するから、ほんとに便利なもんになったわいね。

四十五、賑やかだったお七夜参り

S・T

お七夜になると、越坂や新保の年寄りらっちゃ、でっかい風呂敷包みを背負って、寺の坂を上がって来るげん。寺に泊まるがに、毛布や綿入れを持って来るげんてにゃ。子供等も寺へ行くかと、ゼン（お金）を一銭持って寺へ行ったもんや。寺の御堂は、

もういっぱいになっとるげん。入口の三ヶ所の所にはあばらっちゃ、まいもん売っとるげんてにあ。柿や栗も売っとるさかい、小さな柿を買って、ちよつこと座りこんでいると、日本髪を結った花嫁さんが姑様と仲人様に手を引かれて、参りに来るげん。嫁様たちの批評してゐると、楽が鳴って坊様達が揃われて、お経が始まるとおとなしなつて。ナンマイダ、ナンマイダと拝んでおつてん。

参りの後は、お講によばれるげん。お講腹三日と言つて、腹いっぱいよばれたげ。婆達から買った小さい柿も、うまかつたなあ。

花嫁さんが参りしたのは、「げんどう参り」と言

っていました。

今は無くなつてしまいました。

四十六、秋の山

Y・I

宝立山に紅葉狩りに行ったときに、鶺鴒の鳴いてい
る群れのいるのにびっくりしてね。子供の頃、父と
一緒に鳥かまえに行った時のことを思い出したげ。

終戦の頃の小木の山にもぎょうさんな小鳥が居つて

ん。ひわ あつとり いかる いすか しめ れんじゃく
鶺鴒・花鶺鴒・桑鷹・交喙鳥・鶺鴒・連雀など本当に

ぎょうさんおつたもんや。

専門に小鳥を取る人は、高級な鶺鴒や白腹しろはらなどを、

カスミ網で獲つておつてん。一度ハゴに連雀が二羽

止まった時は、びっくりしてしもてね。椋鳥の群れが「ギャギャ」鳴いて来るとハゴを倒して、大声を上げて騒いだりしたりしてね。わずかな時間だったが、スリル満天の時間だったなあ。あんなぎょうさん渡って来た小鳥たちは、どこへ行ってしまったかちょっと淋しい。鶉や花鶏のあの香ばしい味は、今でも本当になつかしいなあ。

鳥かまえの間に松茸を取った山は、荒れてしもて入る事も出来んしね。

昭和の山遊びを、思い出しておるわいねん。

四十七、廊下の掃除

Y・I

火野正平さんの「とうちやこ」で、小学校の廊下を掃除しとったのを見て、俺らっちゃんの小学校の頃、朝礼の前に自分らの教室の前の廊下をみがくのが、もう授業の始まりやってん。袋にコンカやケンゾウおからを入れて汗かきながら、競争して磨いたのを思い出しながら、テレビを見とってん。

五年生の時、一年生の教室の掃除当番の日のことやけど、女先生が監督しておるのが、はがやしかったので、面白半分に、当番のものと、やったるかと言って笑っておってんけど、やるぞやるぞと目くばせをして、拭かさいま。1. 2. 3と言って、一斉

に女先生のスカートをさっとまくり上げると、女先生の目が釣り上がり、全員平手打ちをくらったげ。ベタのくせに、キカンがようと笑ったことを、つい思い出して、笑っておる年寄りになってしまった。その頃の上履は草履ぞうりやってん。

四十八、学芸会

Y・I

昭和二十四年だったと思うのだが、義兄が学芸会に、担任の生徒に浦島太郎をさせたいと思うけど、煙を何とか出したいと父に話しとるさかい、そんな簡単や鉄を焼いて重油につけると、煙は出るわいねと話したら、教えてくれと言うさかい、七輪に火

を起こし鉄釘をうす黒く焼いて重油につけるんやと話したら、玉手箱までの間をどつするかと言つ。

そんなが簡単や、画用紙で花壇を作ればいいがと言つと、父は、ほんなら俺、玉手箱を作つてやるわと。金銀の紙を貼った玉手箱を作つてもろて、義兄は、非常に喜んどったね。

当日、学芸会を観に行くと、松坂先生が準備してるげ。いざ、本番。うまく玉手箱まで竿が伸びて、煙が上がると、会場はわあっと一気に盛り上がったもんや。変わった事をする、「電気仕掛け」と言つた時代やから、余計に盛り上がったのでしよう。浦島太郎は、現在あのにゃの会のＴさんでした。

四十九、雪の思い出

Y・I

今年はなんときょうさんな雪が降ったけど、俺等の子供の頃は、今年のようにぎょうさんな雪降ったけど、今年のように騒ぐ事はなんもなかった。雪が降って積り積もった町の中は、賑やかな子供天国やった。自分で、スキーや橇そりなど作っては、町の中を滑り走りまくっておったがや。

橇そりは漁業会からト口箱をだまって貰って来たけど、怒られた記憶はなんもない。釘の頭の分だけ削り取って、雪の抵抗を少なくしたり、子供心にも知恵がはたらいとったもんや。

青年学校には、木製のスキーがあっただけど、靴を

取り付ける皮のバンドは、固くなってしもてるさかい、ヤメ（綿糸）にしはってみたけど上手くいかず、スキーには雪のぼっこりが付いて滑られなかった。新町坂は、子供にとっては好い滑り台やった。

函館帰りの姫のあんまが、スケートで得意そうに滑っておったのが、うらやましかった。

五十、ころがったバス

Y・I

時や時間はあんまり、はっきりとおぼえておらんけど、小学校の三年頃だったと思う。県道沿いの町の端っこの家は、俺とこの家うちやってん。宮下さんとこまでは、家は一軒もなかったげ。

当時の郵便物には、能登の国小木港、学校通り一軒家、岩城亀水宗匠きすいと書いてあったけど、道路は舗装されとらんカマボコ型の道路やさかい、運転もしにくかったと思う。

旧マルゲンの所から中山さんの車庫までは、全部田圃やってん。それも深い田圃やってん。マルゲンの所が停留所やってん。家に遊びに来とった人達が、バスがカタガッて行くじゃあど騒いどったら、ころがってしもたげ。乗とった人も運転手も、みんな怪我けがもなかったらしい。

なんのセカマボコ道やさかい。左側に寄りすぎたらしい。すぐに消防団の人達が、ロープをもって来

て、引き上げる時、一回目のロープは切れてしもて、二回目はより太いロープで、近所の人達と一緒になあって、どうにか引っぱり上げたのを思い出したげ。八十年も前の出来事やさかいね。

五十一、とんばた、あれこれ

Y・I

今年のとんばたは、風が強くてだっちゃんになつてはいだるい祭になってしもて淋しかったのけ。昔は、四月十七日・十八日やってん。

その頃になると、日和山の桜が満開となり、珠洲の方からもぎょうさんな人が、花見と祭を見に来て、賑やかな祭やってん。日和山の桜が風に吹かれてく

る湾に、とんばたの船が八本、美しく手漕ぎでゆっくり廻っておったがや。

小学校五年の時（昭和十七年）やったと思うけど、東京が空襲やさかい、祭の太鼓を叩くのをやめると、消防団と役場の人が。伝馬舟で廻って来ても、東京まで太鼓は聞こえんわいと、太鼓を叩いておったけどね。

御座船になる船は二艘に絡げて、それは大変やつたげ。船主の方は御輿の供え物や、乗船の人のごっそう（御馳走）作りにも大変やつてん。

かんさま
神様に仕える事が大漁につながるもんやと、正直に素直に祭を通じて、仕えられていた漁師の人達に

感謝感謝です。

なんふう
南風や伴旗祭船喘ぐ
ふねあえ

五十二、思い出あれこれ

Y・I

七月三日の小木小学校の創立記念日の相撲大会が近づいてくると、町内ごとに相撲場を作り練習をしたもんや。西町、東町は御船神社の裏に、新町はモヨモン（橘本家）の裏庭、下浜は長四郎山、高浜は旧役場裏と谷内の山、庄崎は日和山の相撲場、三ツ矢はなかったらしい。相撲大会が終わると、七月十日は恵比須祭、十一日は観音祭で、山切籠（山車）だしが七台、武者人形を飾り、デコンデコンカツタコイと、

笛太鼓で賑やかなもんやった。

昭和二十三年頃までは、男性は、女の長ジバン

(襦袢)で化粧をして、ゆったりと曳き廻り美しい

ものやった。祭が終わると函館へ烏賊漁に行き、帰

ってくるのが年の暮れやった。九月の袖切籠祭は、

烏賊漁の祈願祭でもあったようだ。小型船を二艘絡

げた御座船に御輿を乗せて、港を巡行して、こんで

(これで) 烏賊も大漁やぞと話しながら、酒肴を酌

み交わしたのも、今は只々なつかしいものになって

しもたね。

連載を終えて

御座船に乗る寸前の荒御輿

放電の烏賊釣船に目が眩む

虫すだく浦曲の東西行止り

どっと来し三十余人の子供らと

年の初めの太鼓教室

漁師等は庭と言ってる日本海

一夜勝負の烏賊火が燃ゆる

思い出を俳句・短歌に代えて

元公民館長・あのにゃの会会長

岩城 康徳

あとがき

よもやま話の第3弾を出版する運びになり、大変嬉しく思います。今回は、前回と違って写真やイラストが挿入されていないので、少し読み辛いかも分かりませんが、ご容赦下さい。よもやま話は、小木地区のひと昔前の実話を小木の方言でまとめたもので、後世に残していけば価値のある事だと思います。この度の執筆者は女性も含まれていて、又、沢山おいでたので集まる度に笑いが有ったり、賑やかで盛りあがっていたと聞いています。

第3弾を発刊するにあたり、関係各位の皆様にも多大なご協力を得られました事を、編集委員一同大変嬉しく思っています。是非、ご一読されれば幸いです。

編集委員 小路 長丘

協力者

あのにゃの会

岩城 康徳

板谷 京子

土坂 統正

宮崎 良子

原稿

岩城 康徳

奥成 正氣

編集委員

岩城 周三

西戸みわ子

上見 純二

板谷 幸子

寅松 澄子

矢形 実

板谷 京子

寅松 澄子

小路 長丘

坂東千代子

奥成 正氣

中山 茂喜

谷内 茂

板谷 幸子

谷内 茂

釣谷美代子

背戸 明美

発行日 平成三十一年三月三十一日

発行者 小木の宝探訪事業実行委員会

能登町立小木公民館

編集 小木公民館協力委員よもやま話会